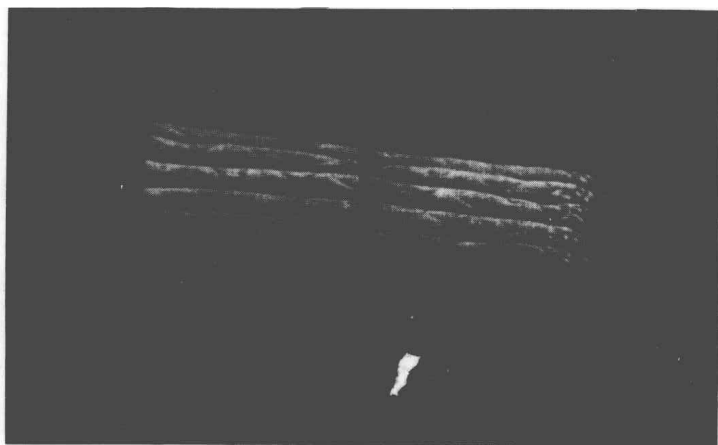


瀬戸内晴美
見知らぬ人へ

創樹社

瀬戸内晴美

見知らぬ人へ



創樹社

見知らぬ人へ

0095—0044—4249

1974年12月20日第1刷発行

著 者 瀬戸内晴美

発 行 者 竹内 達

発 行 所 株式会社 創樹社

電話 東東 815・3331(代) 振替東京・154580

東京都文京区湯島2・2・1 〒113

本文印刷 望月印刷所

製 本 美行製本

装 画 浜口陽三

製 本 道吉 剛

1974 © Harumi Setouchi 乱丁・落丁本はお取替えます。

目次

I

道	35
母	38
故里と酒	47
幻の大阪	51
はらから	55
阿波路のお遍路	64
母ときもの	67
やまもも	70
名前雑感	73
港のある街	77

わたしの母校

85

ふたりの恩師

88

三種の妙技

91

ふるさと雑感

93

迷信と私

96

わが若き日

101

ふるさとのひな祭り

103

ふるさとの初日

110

Ⅱ

女優になりそこねた話

115

春 寧

118

わかれ

120

春の夜	124
タンスを洗う	131
女の友情	134
私の処女作『痛い靴』	137
処女作のころ	138
幻影なき青春	141
流れのほとり	145
捨てる	152
ふろ	153
七色のバラ	156
時計	159
みれん	161
見知らぬ人へ	169

Ⅲ

旅路

水上雜感

少女

土と少女

ふるさと

職人の血

菜の花

正月の旅

作家の日記

尼寺の雛

引越し病い

231 228 225 222 220 217 209 202 194 186 179

旅 愁

辞書にも表情が出る

酒中日記——酒びたり好日

カメラのエロティシズム

無 題

私の後悔

食べる

手相みてあげましょうか

ただひとつの道

瀬戸内晴美

見知らぬ人へ——文学的自叙伝

白い手袋の記憶——エッセイふう

女のアクセサリーの一つとして、白い手袋が、たいそう流行ってきた。この正月、街を歩いている若い女のほとんどすべてが、申しあわせたように、目にしみる白さにかがやく白い手袋をはめていた。

——おしゃれのポイント、白い手袋——こんな言葉が、たいていの婦人雑誌のどこかの頁に顔をのぞかせていた。著名なデザイナーや美容師、無名の埋草雑文家まで、そのおしゃれ頁をうけもった人たちは、一枚千円なにかしの、あるいは一枚二百円そこばくの原稿料と引きかえに——白い手袋こそ、あなたのおしゃれのキイポイントである。これは和服の雑多な色彩を引きしめ、洋装のオーバーの重つくるしさにシックをそえる……ETC、と書きつけていた。

何世紀にもわたって、白足袋を愛好してきた、この国の女たちの嗜好の伝統に、手袋製造業者が思いを致したかどうか。とにかく街中に白い手袋を氾濫させたものだ。

その洪水のあふりをくってか、いつのまにか、私の小引だしにも、白い手袋が、三組たまって

いた。流行にレジスタンスするほどの確固たる意見を持つわけではないけれど、私は、この白い手袋を一つとして、じぶんで買ったわけではない。どれもみな、ちょっとした労力や好意のお返しとして、人から贈られたものばかりであった。ハンカチと同じで、いくつあってもさしつかえないものとして、だれもがえらぶ調法さから集ってきたのだろう。

なるほど白い手袋は便利であった。

和服にも洋服にも、黒いハンドバッグにも赤いハンドバッグにも、白いスカーフ、青いマフラー、訪問、デイト、そのいづれにも効用は数えあげることができないほどだ。

ハンドバッグに、白い手袋を一つしのばせておけば、出先きで、急に改った訪問を思いついたときでも、うす汚れた色手袋を、洗いたての白い手袋にかえるだけで、白い衿をつけかえたような安心感がわき、心がきっぱりとして、人と逢うおっくうさと気おくれに、決断と自信をあたえてくれた。

私にとって、白い手袋はまた、意識下で「式」につながっていた。

そこで、「手袋を投げる」という言葉を思いたす。これは決闘の申し込みを意味するのだそうだけれど、この場合の手袋も、私のイメージのなかでは、絶対に白でなければならぬ。ダンディなプーシュキンやレールモントフの投げた手袋は、脂じみた皮手袋ではなく、あくまで目にしみる白い手袋であってほしいのだ。

儀式と白い手袋——今はおしゃれのアクセサリとして、すっかり日常化した白い手袋に指を

とおす時、私はふっと、心の奥に、むずがゆいようなうずきが走るのを覚える……。

二十数年の昔――。

私は、四国の片すみの、小さな町の小学生であった。

平屋建、セピア色の古ぼけた校舎の屋根いっぱいに、らんまんの桜の花が、南国の陽に映えている。ねむく、けだるい四国の春のかげろうのなかに、巡礼の鈴音がきこえ始めるころから、講堂では「式」がくりかえされるのだった。

卒業式、入学式、進級式、地久節、天長節……それらの式は、私にとって、白い手袋の記憶にはじまり、白い手袋の記憶でとじられた。

白い手袋をはめた十本の指が講堂壇上の正面の檜の開き戸にかかった瞬間、私たちは長い最敬礼を強いられる。上気した顔をあげてみると、あけはなされた開き戸の、紫の幕のかげから、くもった鏡のように、にぶく光る御真影が見下している。

白い手袋の手が、桐の箱のふたをとり、にんじゅつの巻きもののようなものを、うやうやしくおしいただく。

ふたたび、こんどこそ無限に長いように思われる最敬礼の号令がかかる。意味もわからない、お経のような教育勅語がえんえんとつづく間、上体をおりまげ、床をみつめていなければならぬ退屈と苦痛は、小学一年生や二年生の小さいからだに幼い神経には、たえがたい、どうもんであった。

私の隣りにたっている、白痴にちかいまっちゃんという女の子は、ギョメイギョジと、ふるえをおびた声が、莊重な余韻をひいて消えるのを待ちかね、おしっこをもらすくせがあった。長い緊張が、ギョメイギョジで終りをつげる、その喜びと安心に、身体中の筋肉と内臓が、一時にゆるんでしまわうらしかった。

まっちゃんは、二年の終りから、学校に來なくなつたけれど、私は、最敬礼の度、頭にじりじり血がのぼってくる、まっちゃんの尿の音を思いだしてならなかった。

そんな一年生のある日、私たちのクラスは、校長先生の授業をうけていた。担任の女教師が急病で休み、教頭も留守なので、校長が、気まぐれに授業をみる氣になつたものらしい。

校長先生の授業だというので、たいそう固くなつた私たちに向い、おなががつきだしはじめた校長は、とりわけにこにこ顔をつくつて、きいたのであつた。

「みなさん、神さまって何ですか？ 知ってるひと、手をあげてごらん」
いろんな答がとびだした。

「天神さまです」

「八幡さまです」

「イエスさまです」

「おてんとさまです」

「おむつつあんです」

おむつつぁんとは、伝説の阿波狸のなかの、おむつと呼ばれる女狸のことであった。町のなかには、この女狸をまつた、おむつ大明神のはこらがあり、その前で油げ屋が一軒、結構生計をたてていた。

校長先生は、ひとつひとつの答に、悠揚とした笑顔で、うなずいてみせた。

「ほかに？　まだありますか？　神さまってなんですか」

私は、校長先生が黒板に大きな片かなで「カミ」と書くのを、じっとみていた。

はだかの手。ふとく大きな赤みをおびたいかつい手。白い手袋をぬいだ校長先生の手は、ちかちかとみると、ひどくありふれた、つまらないものに見えた。

とつぜん、その手が、まっすぐ私に向ってつきつけられた。

「はい、いってごらん。神さまってなんですか？」

ばね仕掛のようにとび上った私は、

「テンノウヘイカです」

と反射的に答えていた。

いったとたん、私はまっ赤になり、泣きだしそうになった。

校長先生のはだかの手が、白い手袋を連想させ——その白い手袋が、紫の幕のかげに、にぶく光る御真影をよびおこしたのだ。

私のうちは、その町で二、三軒しかない、神殿仏具商であった。紫の幕は、町の芸者屋のおか

みが、毎日のように店に買いにきている。遊客がとだえぬようにと、赤くぬったおいなりさんをまつるために――。幼い私にとって、神さまとは、うちで商われる商品の一種であった。おいなりさん、おしょうでんさん、こん光さん、大神宮さん。しかし、それらの「神さまの家」のなかで、一番大きく、わが家で最も大切にあつかわれるのは、なんといっても、郡部の小学校へおさめる御真影奉安殿であった。

父が設計してつくった、総檜、あかやねぶきの奉安殿の写真は、錦表紙のアルバムに張りつけられた。父の店の歴史であり、誇りであり、一枚看板でもあった。

私の小学校ではすでにコンクリートの奉安殿になっていたけれど、父にいわせれば、コンクリートの神殿などは、もつてのほかの邪道だった。

こうした家にそだった私の、頭のなかには、神さまたちが、雑然と雑居していても不思議はないであろう。神とは何か？ と、突然問われ、私の頭のなかの神さまが、ひとつびとつとびだしていき、最後にいい残されたのが、テンノウヘイカであったにすぎない。

私は、口にだしたとたん、おそれと心配でふるえあがったのだ。えらい校長先生が、白い手袋をつけ、あんなにも、うやうやしく敬意を表し、私たちが、あんなにも苦しいおじぎを長々と強いられる、その尊いものを口にした怖ろしさであった。

気がつくと、私のそばに、校長先生が立っていた。思いがけないことには、校長先生はいっそうにこにこした顔で、私の頭をなでていた。